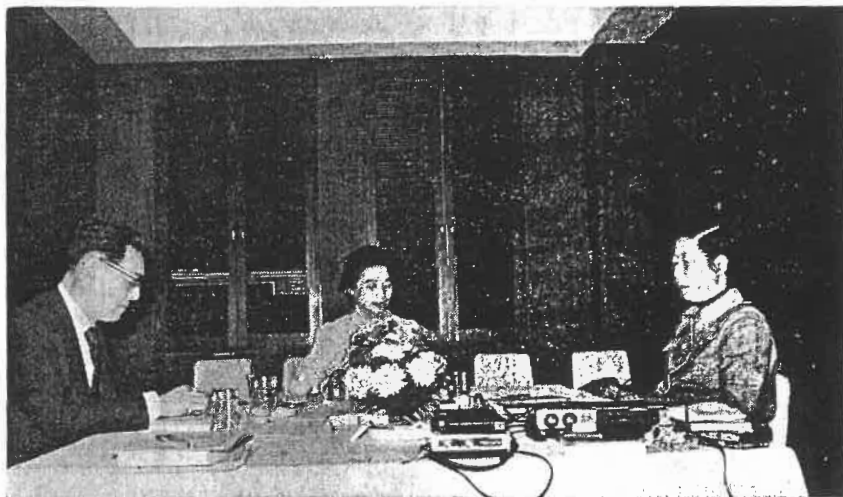


## 公衆栄養教育

—その考え方と実際—



出席者（発言順・敬称略）

東京医科歯科大学難治疾患研究所疫学部 柳 沢 文 徳  
大妻女子大学家政学部食物学科栄養指導研究室 前 川 當 子  
女子栄養大学栄養学部食生態学研究室 足 立 己 幸

編者 “公衆栄養”教育を具体的にどう展開するかということ話し合う前に、まず最初に公衆栄養”をどう考えるか、その概略を先生方からお話ししていただきたいと思います。

### “公衆栄養”教育を考えるにあたって

柳 沢 まず、お断りしておきますが、私が本日ここに出席したのは、まがりなりにも公衆衛生学を学んでいる一人として、健康を守るには、いまの言葉でいえば生態学的な問題と食生活が非常に密な関係上、公衆衛生学という面から、食物について学ぶ学校において、公衆栄養という学科が誕生したことについて、

非常に関心をもっているということからなんです。

ざつぱらんにいえば、“公衆栄養”というふうな言葉で何故教えなければならぬかということを考えているわけです。だから、たとえばある栄養士養成施設校で“公衆栄養”というふうなもの講義内容が行われていたならば、あらためて問題にする必要がないのではないかとも思うのです。この実状は知りませんが、一般的な感覚として、公衆栄養という講義をどうしようかというふうな論議がなされているということは、過去において、公衆栄養という内容——各人の受けとめ方でよい——の講義がなされていなかったと

もいえるのかも知れません。

ですから、当然この論議をするときに、“私のところは公衆栄養という科目をあらためて講義する必要がない。従来どおりにやつていけばいいのだ。だから、それに対して公衆栄養の時間を振り当てればそれで済んでしまう”ということがあると思います。しかし、そこでいちばん大切なのは、何が公衆栄養であるかということとは私も非常に疑問がありますが、栄養士養成施設での教育の場でなく、住民の食生活をよりよくするという目標の学問を教えようとする学科では、当然、公衆栄養の問題意識がなければいけないのです。

だから、なにか上から与えられてしまったからこの問題を考えようという姿勢ではなくて、自分達の教育内容の反省という面から考えたほうが、よりよい道が出てくるのではないかと思います。ですから、たとえば栄養士をつくる、管理栄養士をつくるという学校で、その目的としての教育が満足されていたのかどうかという反省が行われたか行われなかったかということなのです。困った、困ったということではないと思うのです。ただ、上から与えられた言葉、即ち公衆栄養というものができてしまったから困ったということであつて、本質的には困っているのか困っていないのかということは、学校の実状を知らない私にはわからない。また当然、いままで私がみているところによれば、“困らない”というところもあるというふうに受け止めた方がいいわけなのです。

### “公衆栄養”教育の必要性

立場を変えてみれば、公衆栄養の講義が必要というふうな、栄養審議会から出てきた真意はあまり明らかになつていないようですけど、それなりの理由もあるという感じも受けます。公衆栄養という教科目が必要だという、社会的にみた意味合いを歴史的にみつめてみる、これが非常に大事なことになると思うのです。

足立先生の公衆栄養教育についての考え方を拝見しましたが〔本誌、46(1)：15、1975〕、そこに“社会的な背景”という言葉があつたと思うのです。それは確かに必要な言葉ですけども、その意味の中にもう一つ歴史的な位置付けというもの

を強調したほうがよかつたのではないかと思います。そうすれば、公衆栄養という科目の要請が、自然にわかつてくるというような気持がするのです。

そういう抽象的なもののいい方ではなくてお話しすると、たとえば現在、だれでも赤ちゃんに母乳をやるのがいちばんいいことだということを経験的にも知っているわけなんです。ところが、現実においてはそれが十分に行われていないのですね。母乳ではなくて人工栄養のほうが多いようです。この現象は、おかしいと思うのです。たとえばいろんな社会情勢——お母さんの立場というものもいろいろあると思いますけど——たとえば乳製品をつくる企業のほうがそういう形にもつていつてしまった、それでそれに乗つた人はだれかという、赤ちゃんに接する小児科医などがそういうふうに体系化してしまつている。あるいはまた医師自体がそう考えなくても、医療システムとして母乳をやるだけの看護体制とかいろんなものがないというふうなことが起きてしまつているわけです。

そういうこと一つ考えても、赤ちゃんの栄養についてほんとうにまじめな線で正しく行われていないにもかかわらず、無批判にそのまま過ぎてきた、この歪曲を追求することが一つの具体的な公衆栄養だと思つてののです。

### 批判精神をもつた教育

私が“歴史的に”ということとは、そこに批判精神をつくらなければいけないということです。でなければ母乳を与える道につながらないからです。私がみている範囲内においては、従来の栄養士を主とする専門教育とその教育理念は大きく変わつてきていると思うのですが、過去にみられた良妻賢母教育というふうな形とか、ともかく批判する考え方というものをほんとうに教育しているかどうか、そういうことにも関連して考えたいわけなのです。

だから、現実がいままでのことを批判していくということが一つの目的論になり、それが総論的なものとしての考え方にもなつてくるのではないかと私は思うのです。そこら辺をこの教育の基盤

にしたいですね。批判をするという考え方がなければ、公衆栄養という学問は進展しないというふうに私は思います。

### “公衆栄養”教育の柱

実は私も公衆栄養というような著書を数人で書くことになつてはいるわけです。その内容は十分ねれていませんが、栄養管理、あるいは栄養指導という問題と公衆栄養との関連を重視しています。なぜなら、栄養指導というものが適確な形で行われなかつたという欠陥が、現実に出ているのではないかと思うからです。それは何かというと、栄養指導の理論体系というものができていなかつたことに原因があると思うのです。だから、栄養指導——これは私なりの考えで用いている言葉ですが——の体系化あるいはそれを学問的に位置付けたというものを、私は原則的に“公衆栄養”の一面の内容としたい。その実践的、技術的なものが栄養指導であるということになると案外すつきりしてしまうのではないかと思うのです。非常に乱暴な意見を出したわけですが、ごめんなさいけれども……

だから、早くいうならば、栄養審議会から“公衆栄養”という言葉が出たけれども、誰もその範疇ないし定義をしていないから、今後いろいろな解釈がされると思うのです。それはそれでよいと思います。私は目標として“住民のためになる食生活というものを教えるものではないか”といえ、非常に簡単ではないかと思うのです。これも乱暴ないい方かもしれませんが、ですから、もう少し定義化してくるならば、WHOや公衆衛生学者がいつているところの、“公衆衛生”とか“健康”とかという定義の問題に対しての“健康”という位置づけの中で、それを特に栄養とか食生活という立場に立つてみたものが“公衆栄養”ではないかと思います。また栄養学という基本科目問題をふまえて、食というヒトの行動的なものを中心にしてみたいというわけです。

公衆衛生学というよりも、むしろいわゆる社会医学の面としてのとらえ方として、この食の問題をその中へ取り組んでいくということも、一つは公衆栄養という考え方に相当するのではないかというふうにも思っています。“社会医学でみてい

く”その“社会医学”とはいつたい何かということですが、一般的な考え方をどう解釈なされてもかまわないと思います。そのような気持ちで総論、各論でわかりやすいような講義のしかたをすればよいのではないのでしょうか。繰り返しますが、ある学校では公衆栄養なんていうことは必要ではない、もうすでに行われた問題であるということもいえますね。行われていなかつたと意識するならば、何が行われていなかつたのだということに對するところの講義をすればよいでしょう。

### “公衆栄養”の体系化

それともう一つ加えたいのは、先ほど栄養指導というもののむしろ理論化の問題、体系化の問題を申し上げた。ところが公衆栄養の学科体系とは食い違いが出ているわけですね。というのは、今度の“公衆栄養”は、“栄養学”という科目の中に組み込まれた言葉であるということなのです。ところが、栄養指導は全然別枠で入つてきているわけです。公衆栄養というものは栄養学という狭い領域ではなくて、広い立場に立つたところで位置付けをしなければならない。だから、私自体は、栄養学の範囲に入れるということではなくてもつと広い立場に立つてものを考えるということに重点を置いたほうがいいのであつて——栄養学の範囲に入れたのは行政的な手段であつて——教育大系からいくと誤解を生じるのではないかというふうに思っています。

### “公衆栄養”の受け入れにあつて

前川 今日、お話しを伺いにきたわけですが、私が話してきたのではないのですけれども……

今回の栄養士法施行令の一部改正ということで、各養成施設に栄養学の授業科目として公衆栄養という新しい科目が入つてきたわけです。私どもの学校では、当然私がつべきだろうということで、大騒ぎもなにも起きていないわけです。

それと申しますのは、私がずつと栄養指導を担当しておりますし、その栄養指導の中で、やはりコミュニティーの問題、栄養教育の側面、社会学、心理学の問題などをだいたい含めております。です

から、その部分をとりあげて、特に栄養学全般を基にして構成し、公衆栄養とし、これを充実させていくように考えております。栄養指導も実習、実験というのが必修となり、同時に単位も多いものですから、内容の充実ができると思います。ともかく学生たちと共に学び、研究する姿勢ができました。私のところは前からそういうふうなカリキュラムでやっておりましたので、自然の状態を受け入れ体制ができ上がってしまったようなわけです。

### 栄養指導で取り上げてきたこと

幸いなことに、私の大学では視聴覚センターもできあがっておりますし——もともと発祥はLL (Language Laboratory) 教室から起こったのですけれども——そのLLで、英文学部の学生だけがそれを扱うのではなくて、栄養指導の実習としてこのセンターを使い、普及技術を教えたいということで、LLから視聴覚センターに移るときに申し入れをしました。栄養指導の実習の中で視聴覚のほうは5、6人くらいずつ、OHP (Over Head Projector) の使い方だとかスライドの作り方、ビデオの利用あるいは会話の練習、それをテープにとつてみるというようなことなどを現在もいたしております。

また、調査やコミュニティーの問題ですけれども、東京都における幼児の栄養調査を私の栄養指導研究室で引き受けております。学生が調査員となつて実施いたしております。学生にとつて非常によい勉強になつています。たとえばおやつの種類、量などが多くなつたことや、昔のおやつという概念ではとらえきれないような幼児の食生活の実態など観察してきました。そういうことも、やはり学生が身をもつてわかってくるということで、非常に興味をもつてやっております。また一方ではただ実習だけではなくて、たとえば必要によつてはどんどん実験をして問題解決をしていくことも大切だと思います。

食生活に関係のある問題は、やれ社会科学に属するの、やれ自然科学に属するの、分析だからあるいは総合だからということではなくて、たとえば子どもの栄養なら、子どもの食べもの、地域住

民の食生活、それがうまくいかないとしたらいつたい何があるのだろうかということ、学生自分で目をつけてほしいのです。それから解決の方法はわれわれで指導すればよいのだという立場、そういう姿勢でいままで続けてきております。

### 栄養学としての“公衆栄養”

いま柳沢先生は、公衆栄養を“栄養学の範疇に入れるのはおかしい”というふうにおつしやいました。けれども、お決めになつた方たちが公衆栄養を栄養学の中に組み込んだということは、私は私なりに受け止めているわけです。

と申しますのは、いままでの養成施設というのは、栄養学といいますと栄養化学、食品学などを、主に農学部のご出身の方が教えてきました。そうしますと、人間を扱うところの栄養学——ヒューマン・ニュートリション (Human Nutrition) という面が弱かつたのではないかということが考えられます。むしろ栄養指導のほうからそちらのほうへアプローチをしていた。栄養指導でできるだけ人間を対象とした栄養学、食べる時点においては食事なので、食べるということもを考えていたわけです。もちろん動物実験も貴重だと思うのですが、それを常態の人間にすぐ振り向けて考えるということには少々飛躍があるような気がします。

### 社会的ニードと“公衆栄養”教育

今回のカリキュラムの改正について問題提起が多すぎるような気がするのです。もう少しすなおに受け止めて、みんなで自分の大学の中で静かに思考したらどうだろう、そこに一つの哲学があつてもいいのではないかということ、申し上げようと思つたわけです。どんなに第三者の方がおつしやつても、その養成施設としての大学はそれ自体施設なりの人的条件、施設の条件等いろいろなものがありますので、それ以外のことはできないわけです。その中でどういう受け止め方をして、どうしたならば社会に役に立つ、社会に適應できる栄養士が、あるいは管理栄養士が養成できるかということが問題点だと思います。

現在は栄養指導をするために、かつての職域と

違つてずいぶん多方面から栄養士、管理栄養士の要求があります。たとえば会社の健康管理室のような職域は、確かにそこには医師もいます。しかし栄養士が必要なのだということがわかつてきて、栄養士を採用するようになってきています。また施設の集団給食も——これはある意味では、家庭内の食事と違ひまして、これも公衆栄養の枠の中に入ってくるものだろうと思ひますが——優秀な栄養士を必要としています。

そういうことですので、これからも公衆栄養は教えながらぼつぼつと柱を立てていつて、煮つめてみたいと思ひますので、今日これとこれとこれが柱だということは申しあげられません。

### 健康と食生活

ただ、食生活あるいは食べることをどうしたら、この非常に問題の多い環境に対して健康な生活ができるか、健康生活を維持するために絶対に必要な食生活というのを、さらに突つ込んだ決め手というか、そういうものを探り出していきたいという気がしております。

WHOの憲章の中で、健康とはうんぬんという定義がありますがけれども、あれはどこの面に使ひましても適用できるものでありまして、健康でなくてなんのそのというような気持をつねにもつております。政策的な問題とか医療の問題とか、そういうものは私はいま触れたくないのですけれども、これで来世紀にほんとうに人間が健康に暮らしていけるのかという未来学的な予測なども、いろいろ興味をもつて読んだり調査などもしております。ですから私は、健康と食生活の関係を歴史的に環境的にとらえていく部分をこれから取り上げて、公衆栄養として枠組みしていきたいと思つております。

編集部 足立先生には“公衆栄養教育の試み(前述)”を本誌1月号に執筆していただきましたが、他に何か追加することがありましたらお願いいたします。

### “公衆栄養”教育の視点

足立 本誌1月号に書きました教育内容は、学部二部のものです。学部一部については、吉川教

授が公衆栄養を、私は栄養管理を担当してきました。その中では、今柳沢先生や前川先生がおつしやつたと同じような心境を抱いていました。

栄養管理の授業——私は総論をやつていますが——のちようど半分の時間(90分授業の5~6回)を用いて、いうならば公衆栄養的な視点で、“栄養”や“食”をみる力をつけようとしているわけです。栄養管理技術や栄養教育技術の養成に必須の“素養”と考えているからです。そういう意味では“公衆栄養”という科目が特別にはなかつたわけですが、“栄養管理”の中で必要にせまられてやつてきた、それが今度社会的に認知されて、独立した科目としてオープンにやれるようになったのでたいへんうれいしい……というところが正直な気持です。

公衆栄養という科目には、“公衆栄養教育の試み”にも書いておきましたが、基本的に二つの内容が要求されているように思ひます。一つは、公衆栄養的な視点で“栄養”や“食”をみるというそういう見方についてと、それからもう一つは、栄養学の実践活動の一つの展開として、広域栄養改善とか、コミュニティーの栄養教育や管理とかというふうなそういう分野の“技術”の問題ですが、後者は“栄養管理”の保健所活動の章で、従来の保健所における栄養指導活動の紹介だけではなくて、“これからの地域社会の栄養管理”というふうなタイトルを立てて講述していますので、私個人としては前者を強調したいわけです。

### “栄養”教育での問題点

柳沢 今のお話しを聞いていると変なことになるつてしまつて……。結局は、この栄養学、栄養管理、栄養指導というふうな書物の中で——私は個人の先生方の講義を聞いたことがないわけですから——今までに、書かれているところを読んだ感想を率直にいうと、先生方がおつしやるようなものと内容がまつたく違ひうのではないかと受け止めているのです。

ですから、そうなるつとやつぱり——この問題にこだわるわけではありませんけれども——栄養学の中に公衆栄養を入れて考えてしまつてというつと、非常に狭い範囲の問題になつてしまつていふような気が

します。栄養指導の内容ですが、“栄養”という言葉が主体であつて、“食生活”という言葉が薄かつたというところに、問題点があつたのではないかと思うのです。

前川 私は、カリキュラムを示されますと、やはりそれを善意に解釈していきたいと思ひます。柳沢先生ぐらいにおなりになれば、何をおつしやつてもいいのでしょうか…。

それからもう一つは、従来の栄養指導は何であつたかとおつしやいますけれども、それはやはり学校とか養成施設の差、それから担当の先生は、人間は顔がそれぞれ違ふように考え方もみんな違ひますから、栄養指導をなさつてゐる方も、キャリアが違つていらつしやるわけです。ですから、それによつて、その先生の重点のおき方がそれぞれあると思ひます。教科書どおり教育してゐる方はおそらくいらつしやらないのではないのでしょうか。教科書というのは、学生に読ませて、読んでいらつしやいという程度のもので、教科書を議義で1時間1時間読んでゐるのだつたら、教師は必要ないと思ひますが……。

柳沢 私がいいかかつたのは、学問的な体系として食生活を考察した栄養学、栄養指導があつたのかということなのですが……。

従来の食べものに対する健康の位置付けは、いわゆる人間と栄養素と食物の関連がだいたいの範疇ではないかと思ひます。それは、人間と食物との生理・生化学作用の科学面ではよいのですが、ほんとうに住民の健康に役立つところの学問体系として、この栄養学の範疇でよいかという疑問を出したいのです。

ですから、人間と食べものと環境というこの疫学の3因子というものから分析すれば、その組み合わせでもつて、はじめて住民というふうな問題とか集団という問題における食生活の問題が解決されるのではないかと考えるわけです。

### “栄養指導”の“体系化”と公衆栄養

前川 カリキュラムの中に栄養指導が取り上げられてから20年近くも時が流れ、それ相応に必要な栄養指導というものの内容の積み重ねができて、今回全国栄養士養成施設協会で2年がかり

でその教育内容をまとめました。それもまだ体系とは申してありませんが、栄養指導に限らず、栄養学の範疇でも名称の変更(概念も違うはず)が時々ありまして、関連科目(科学)の外包により、他の科目(科学)も影響を受けるということがあります。応用科学ではその性格はぬぐえませんが、そのため、栄養指導のような応用実践的な学科の体系をズバッと出すということは危険な気がします。

とにかくいろいろ問題はありますが、全国でそれだけやつてゐるなら、その柱を教育内容として書き出してみようではないかということで、栄養士養成施設協会でもまとめた分だけ出すということになつております。しかし、文章はあまり付けない。本当の柱程度のもので、それを体系というなら、それでもよし、組織化というならばそういえるかもしれません。現場からもつてきた組織化という形にしていきたいという考えです。当然授業時間のコマ数に合わせております。

足立 私は、柳沢先生の提起していらつしやる問題に基本的には賛成ですが、申し上げたかかつたのは、“公衆栄養のようなもの”に対する内的な要求が、本気で栄養指導してきた教師たちにはもうすでに育ちつつあつたのではないか——本気でしてない人は知りませんよ——そうだとすれば、その内的欲求に対応し、公然と、自由に展開できる“場”が与えられたということで喜んでいいだろうと……。

柳沢 ですからこの講義というものは、いちばん冒頭に申し上げてゐるように、そのおのおのものの考え方であつて、独創的なものとして、いわゆる住民の健康というものと食の問題について体系化を図られて、それで推し進められていけばいいのだということが基本前提になつてゐるわけなのです。

たとえば砂糖の問題においても、その1日の必要量を多くしてみたり少なくしてみたりということが過去にあります。それなら栄養指導なさつた方が、それに適確なる批判をなさつたかどうかということで、私はその評価をしたいわけなのです。たとえば現在の食塩の問題でも——一般的には今の基準量というもので使用してもかまわない

と思いますけれど——やつぱりそれに対しては十分、批判的な問題の立て方がなければいけないと思うのです。

たとえば、公衆衛生学会でのことですが、私のところで行つた農村の貧血の研究で、その対策として貧血者に肝臓を与えた。そうしたら、いろんな人から“PCBやメチ水銀汚染の中で、肝臓を毎日そんなに食わしていいのか”という質問が出てきたわけです。食はこのような問題にまで展開をする必要があるわけですね。私はそういう意味でいつているのであつて、べつに従来の講義をしている先生方が悪いとかなんとかということを知っているわけではないんです。

足立 内的な要求があつたということと、十分に展開できたかどうかは別のことで、柳沢先生が指摘される欠陥について、私たち自身、非常に困っているわけです。また、“栄養指導”についても、私は現在体系化できているとは思えないのです。問題意識がやや鮮明になつて、体系化を試みはじめたというのが正しいかもしれません。

### “栄養指導”のこれからの展開

ところで、さきほどの母乳の話ですが、“いままでの大きな欠陥というのは、母乳がよいと思つている人がいるけれども、現実にはそれができない”と柳沢先生がおつしやいましたけれど、私はその点に重要な問題がひそんでいるように思います。“よい”と思つてすらいない人が多くなつたという事実、それからもう一つは、指導に携わる人、たとえば医師が産院で粉ミルクを飲ませることを勧めたから、栄養士はしかたがない、その範囲内でどのように指導するかを考えるのでしよう、従来の栄養指導は与えられた条件下でいかにうまくやりくりするかを考える。与えられた条件をしようがないと肯定して、その範囲内での対応策として推めがらだつたところに、大きな欠陥があるように思います。

条件そのものを、環境そのものを含めて変えていくところに、これからの栄養指導の新しい展開の重要なポイントがあるのではないかとすれば、そこに“社会的”な“食”のとらえ方、全体的な“食”のとらえ方、それをふまえた変革の方法が

必要になる……。

柳沢 食べもの場合は、医師よりも栄養士のほうが専門家です。だから、当然その面においては医師のほうに批判を向けるべきです。やつぱり私は、本当の批判という精神を植えつけないということが、この科目では非常に大切だと思います。一面において、栄養士——食物の専門家という言葉で表現した方がよいかも知れない——だつたら、やつぱり基本的にはどういう病気に対してはどのような栄養条件を設けなければならない、あるいは食物にはどのような栄養素がある、こんな知識は頭の中に入つていなければいけないわけなのです。

足立 そうですね。

柳沢 食事をただ出すだけではなくて、それに対応すべきものを考えて、そして対応しなければならないということのトレーニングが、残念ながら現在の栄養士には非常に不足していると思います。しかし、その考え方がすべてかどうかは知りません。

だから今日の話からそれですけれども、栄養士が“おかま”を持つて歩くのもいいだろうけれども、もつと“おかま”を持つたら“おかま”を持つということについての批判をしなければならないということなのです。

私は、やつぱり過去における栄養指導というようなものとは違うというよりも、むしろ栄養指導の学問体系的なものを公衆栄養に置いたらすつきりするのではないかというような感じをもつていのです。そうするとあまり矛盾しないし……。私の栄養指導という言葉の使い方は、自分なりに考えている栄養指導という言葉であることを付け加えておきますが……。

### 公衆衛生活動と“食”教育

前川 先生のご専門からいくと、むしろ“公衆衛生の中における公衆栄養の面を強く押し出していらつしやる”と思いますね。いままでの公衆衛生という中の食の問題を扱う部分は、非常に少ないと思います。一頁ぐらい栄養改善のことが述べられている程度です。公衆栄養ではその部分を強く引き出してみたらどうでしょう。

柳沢 確かに医学教育の場での公衆栄養教育は少ないと思います。しかし専門家、むしろ食物を研究する学部とか学科で勉強した人が、その穴埋めをしてくださるようお願いしたいわけなのです。そして食生活の専門家になつてほしい……。

というのは、やはり健康というような問題を考える場合には、食べものばかりではなくて、いろいろ多角的なものがありますから、もち屋はもち屋であるところにおける位置付けができると思っています。ですから、食物について学ぶ方々の教育というものについては、非常に重要な関心をもつわけなのです。

足立 公衆衛生と非常にオーバーラップする部分があるけれども、その中にスッポリ入ってしまうものではない。公衆衛生の食に関連した側面にすぎないのではなく、視点の違いだと思います。

前川 “もち屋はもち屋なりの、公衆栄養というものを位置付けていきたい”ということですね。私それはとても賛成なのです。実は私も、ある出版社から公衆栄養の執筆を頼まれておりました。もち屋はもち屋なりに栄養指導の立場から公衆栄養というものを突っ込んでいきたいと思っております。

さらに、現在の“栄養学”という範疇の中でまとめたいと思っています。いくつかの公衆栄養のテキストが出版されましたが、栄養学総論的、生態学的、保健学的とでも申しませうか、いろいろありますね。公衆栄養として、何が大切か？こぼれてしまっている問題が多いと思います。それを何とか公衆栄養で取り上げていきたいという気持で、その柱を立てています。

環境汚染の問題とか人口の増加、資源の枯渇とかエネルギーの問題から始まりまして、それと食べものとの関係で理解のできるような、またそういう思索ができ、実践力のあるような栄養士を養成していきたいという気がするのです。

それにはやっぱりニュース・ソースが必要で、それで、いろんな学術研究機関情報——今情報過多で、また偏つた情報もあつてかえつて困ることもあるのですけれども——をやはりフルに読んでセレクトして、それを活用していくというような姿勢、勉強のしかたというのですか、そいう

うものを教育していきたいですね。

足立 私は“食”のイメージの中に、食物だけではなく、“人間”と人間が住んでいる“社会”——それはいろんなサイズのものがあると思うのですけれども——それらが入ってくるような栄養学の実践者を育てたいと思うのです。

食物の中の栄養素の部分がずっと前面にあつて、目の前に立ちはだかつているのではなく、視野の中に人間と食物とがあつて、それが生活したり存在している社会がずっと奥行き深くあるような、そういう視野をもつ人間を育てていきたい。これはどんな職域の実践活動をどんな立場でやろうとする場合にも必要な一つの素養のように思うのです。だから、単に保健所の栄養改善活動に固有のものではなく……。

前川 保健所の栄養活動だつて、もつと人を増やさなければ……。

足立 ええ、そういうこともあります。今申しあげたような視野をもたない人を量的に増やしただけでは、根本的な解決につながらないように思うのです。

### 母乳栄養の必要性

前川 話しがそれですが、最初に柳沢先生が、“母乳を飲まなくなつた。それは企業サイドの指導もあるだろう”とおつしやいましたが、私はその原因の大半は医療システムにあると思うのです。たとえば今、分娩するときだいたいのお産婆さんでなくて病院に入ります。1週間入院する。栄養士はそのときに、ただ母親へ1週間の常食の献立をたてればいいわけです。ところが1週間たてば、健康な人はだいたい退院しなければならない。そうすると、初産の人とかあるいは母乳が出なかつたという人でも、乳房をマッサージして母乳を出すとか、添寝をして母乳を出すとかいう工夫がなされなまま、退院しなければならない。それも人工栄養を代わりに与えられて……。

病院に入つて、授乳時間が済むとポツとまた赤ちゃんは乳児室につれてゆかれる。これはもちろん、病気に感染してはいけないとかいろんな理由があると思うのです。しかし、このような状態だと、それこそほんとに出るべき人も刺激が少なく



て母乳が出ないということもあるわけですが、私、病院へいつていちばんそれを感じました。もう少し赤ちゃんと乳房をしゃぶらしてみたらどうなのか。“あなたは母乳が出ないから、じゃあ人工栄養です”と切り替えられていくわけですが、そういうやり方というもの、ますます母乳栄養を少なくしているのではないのでしょうか。

ですから、“母乳は大切なんだ”というふうに仕向けるような医療機関があつてもいいのではないかと思います。今特に初産の人は、何もわからない人がいます。核家族ですから、おばあちゃんもいないし……。そういう場合に、病院へ入つて1週間の間に完全に母乳というものを忘れてしまうという危険が非常にあるようにみえます。

ともかく、母性本能としてやっぱり母乳を与えることがいちばんいいし、スキンシップ (Skinship) の問題や免疫体のことなど、どれをとつても母乳栄養がいいわけですが、キリストだつて赤ちゃんとときには、マリアさんに抱かれていますから……。編集部

今まで公衆栄養の概略をどうとらえるかということでお話しいただいたわけですが、お話しをお伺いしたところでは、その概略というのは相当広い範囲にまでまたがるような気がします。

たとえば“健康”“食生活”と一口にはいつてみても、そのとらえ方は先生方によつてそうとうまちまちなところもあるようにみうけられますし、ましてそれを考えた教育となると、やはり具体的な公衆栄養の教育展開論がなければ、実際にはこれを読む読者にはピンとこないところもあると思うのです。

そこで、実際に公衆栄養を講義するとしたならば、現在の一般的な時間数(90分×15回：2単位)の中でどう展開していくか、実際には養成施設校で公衆栄養の講義をなさらない柳沢先生も含めてお話しただけならと思います。

### 歴史を踏まえた“公衆栄養”教育

柳沢 実際に私が講義をするわけではないし、栄養士養成施設での教育の現状をよく知っているというわけでもないの、無責任な発言になる恐

れがあるのですが……。

ともかく基本的には、“食物”教育の目標をもつて、考える学生を生み出すことが重要だと思います。そして原則としては“住民の健康と食生活 [本誌、40(5)：1972]”に基づいていきたいと思

います。そこで、私が講義をするとなれば、先ほどお話ししたように、今までの日本における食生活教育の欠陥をまずお話ししていこうと思うのです。で、現時点の問題とは違うというかもしれませんが、やはり歴史の背景として、たとえば“女工哀史”——あそこに出ていますね、“住”と“食物”とかいうようなチャプターがあります——というような問題を話していく。“労働”の問題においては“労研”まじゆりをお話ししなければいけない。現代ではそんなばかなことはないよいつたつて、それはいつ出現するかわからないからです。そのようなことが生じた内容をあげていきたいですね。

次にそういうものを踏まえて、そういうことがいつたいいのかどうかということ、歴史的な過程のもとにお話しし、そういう問題から“公衆栄養”というものをどういうふうを受け止めるかということに話しをもどし、“このような問題提起からそれぞれの考えを出しなさい”というようにしてみたい気持もあります。

それともう一つは、“食物”の位置付けの考え方が必要だと思います。いろいろ“食品学”の先生がお話ししているかもしれませんが、いわゆる食物の、人間の歴史的にみたところの過程としての問題提起です。

それを背景として、ほんとうに住民の食べものは“いつたいどうなんだろうか”というサーベアのしかたというものをこの際はつきりつかまえないければいけない。それで、その結果に対するところの批判というものを厳しくしなきゃいけないと思います。

それからもつと“人間”の一生という過程を通じての食生活の見方をしなければいけないという問題。現時点だけを追うことでよいかという問題です。

だから、この食の多様性と個人性の認識をさせ

柳沢 確かに医学教育の場での公衆栄養教育は少ないと思います。しかし専門家、むしろ食物を研究する学部とか学科で勉強した人が、その穴埋めをしてくださるようお願いしたいわけなのです。そして食生活の専門家になつてほしい……。

というのは、やはり健康というような問題を考える場合には、食べものばかりではなくて、いろいろ多角的なものがありますから、もち屋はもち屋であるということにおける位置付けができると思っています。ですから、食物について学ぶ方々の教育というものについては、非常に重要な関心をもつわけなのです。

足立 公衆衛生と非常にオーバーラップする部分があるけれども、その中にスッポリ入ってしまうものではない。公衆衛生の食に関連した側面にすぎないのではなく、視点の違いだと思います。

前川 “もち屋はもち屋なりの、公衆栄養というものを位置付けていきたい”ということですね。私それはとても賛成なのです。実は私も、ある出版社から公衆栄養の執筆を頼まれておりました、もち屋はもち屋なりに栄養指導の立場から公衆栄養というものを突っ込んでいきたいと思っております。

さらに、現在の“栄養学”という範疇の中でまとめたいと思っています。いくつかの公衆栄養のテキストが出版されましたが、栄養学総論的、生態学的、保健学的とでも申しましようか、いろいろありますね。公衆栄養として、何が大切か？こぼれてしまっている問題が多いと思います。それを何とか公衆栄養で取り上げていきたいという気持で、その柱を立てています。

環境汚染の問題とか人口の増加、資源の枯渇とかエネルギーの問題から始まりまして、それと食べものとの関係で理解のできるような、またそういう思索ができ、実践力のあるような栄養士を養成していきたいという気がするのです。

それにはやっぱりニュース・ソースが必要で、それで、いろんな学術研究機関情報——今情報過多で、また偏つた情報もあつてかえつて困ることもあるのですけれども——をやはりフルに読んでセレクトして、それを活用していくというような姿勢、勉強のしかたというのですか、そ

うものを教育していきたいですね。

足立 私は“食”のイメージの中に、食物だけではなく、“人間”と人間が住んでいる“社会”——それはいろんなサイズのものがあると思うのですけれども——それらが入ってくるような栄養学の実践者を育てたいと思うのです。

食物の中の栄養素の部分がずっと前面にあつて、目の前に立ちはだかつているのではなく、視野の中に人間と食物とがあつて、それが生活したり存在している社会がずっと奥行き深くあるような、そういう視野をもつ人間を育てていきたい。これはどんな職域の実践活動をどんな立場でやろうとする場合にも必要な一つの素養のように思うのです。だから、単に保健所の栄養改善活動に固有のものではなく……。

前川 保健所の栄養活動だつて、もつと人を増やさなければ……。

足立 ええ、そういうこともあります。今申しあげたような視野をもたない人を量的に増やしただけでは、根本的な解決につながらないように思うのです。

## 母乳栄養の必要性

前川 話しがそれですが、最初に柳沢先生が、“母乳を飲まなくなつた。それは企業サイドの指導もあるだろう”とおつしやいましたが、私はその原因の大半は医療システムにあると思うのです。たとえば今、分娩するときだいたいの方がお産婆さんでなくて病院に入ります。1週間入院する。栄養士はそのときに、ただ母親へ1週間の常食の献立をたてればいわけです。ところが1週間たてば、健康な人はだいたい退院しなければならない。そうすると、初産の人とかあるいは母乳が出なかつたという人でも、乳房をマッサージして母乳を出すとか、添寝をして母乳を出すとかいう工夫がなされなまま、退院しなければならない。それも人工栄養を代わりに与えられて……。

病院に入つて、授乳時間が済むとポツとまた赤ちゃんは乳児室につれてゆかれる。これはもちろん、病気に感染してはいけないとかいろんな理由があると思うのです。しかし、このような状態だと、それこそほんとに出るべき人も刺激が少なく

て母乳が出ないということもあるわけですが、私、病院へいつていちばんそれを感じました。もう少し赤ちゃんと乳房をしゃぶらしてみたらどうなのか。“あなたは母乳が出ないから、じゃあ人工栄養です”と切り替えられていくわけですが、そういうやり方というもの、ますます母乳栄養を少なくしているのではないのでしょうか。

ですから、“母乳は大切なんだ”というふうに仕向けるような医療機関があつてもいいのではないかと思います。今特に初産の人は、何もわからない人がいます。核家族ですから、おばあちゃんもいないし……。そういう場合に、病院へ入つて1週間の間に完全に母乳というものを忘れてしまうという危険が非常にあるようにみえます。

ともかく、母性本能としてやっぱり母乳を与えることがいちばんいいし、スキンシップ (Skinship) の問題や免疫体のことなど、どれをとつても母乳栄養がいいわけですが、キリストだつて赤ちゃんとときには、マリアさんに抱かれています絵がありますから……。

編集部 今まで公衆栄養の概略をどうとらえるかということでお話しいただいたわけですが、お話しをお伺いしたところでは、その概略というのは相当広い範囲にまでまたがるような気がします。

たとえば“健康”“食生活”と一口にはいつてみても、そのとらえ方は先生方によつてそうとうまちまちなところもあるようにみうけられますし、ましてそれを考えた教育となると、やはり具体的な公衆栄養の教育展開論がなければ、実際にはこれを読む読者にはピンとこないところもあると思うのです。

そこで、実際に公衆栄養を講義するとしたならば、現在の一般的な時間数(90分×15回：2単位)の中でどう展開していくか、実際には養成施設校で公衆栄養の講義をなさらない柳沢先生も含めてお話しただけならと思います。

### 歴史を踏まえた“公衆栄養”教育

柳沢 実際に私が講義をするわけではないし、栄養士養成施設での教育の現状をよく知っているというわけでもないの、無責任な発言になる恐

れがあるのですが……。

ともかく基本的には、“食物”教育の目標をもつて、考える学生を生み出すことが重要だと思います。そして原則としては“住民の健康と食生活 [本誌、40(5)：1972]”に基づいていきたいと思っています。

そこで、私が講義をするとなれば、先ほどお話ししたように、今までの日本における食生活教育の欠陥をまずお話ししていこうと思うのです。で、現時点の問題とは違うというかもしれませんが、やはり歴史の背景として、たとえば“女工哀史”——あそこに出ていますね、“住”と“食物”とかいうようなチャプターがあります——というような問題を話していく。“労働”の問題においては“労研”まじゆりをお話ししなければいけない。現代ではそんなばかなことはないよいつたつて、それはいつ出現するかわからないからです。そのようなことが生じた内容をあげていきたいですね。

次にそういうものを踏まえて、そういうことがいつたいいのかどうかということ、歴史的な過程のもとにお話しし、そういう問題から“公衆栄養”というものをどういうふうを受け止めるかということに話しをもどし、“このような問題提起からそれぞれの考えを出しなさい”というようにしてみたい気持もあります。

それともう一つは、“食物”の位置付けの考え方が必要だと思います。いろいろ“食品学”の先生がお話ししているかもしれませんが、いわゆる食物の、人間の歴史的にみたところの過程としての問題提起です。

それを背景として、ほんとうに住民の食べものは“いつたいどうなんだろうか”というサーベアのしかたというものをこの際はつきりつかまえないければいけない。それで、その結果に対するところの批判というものを厳しくしなきゃいけないと思います。

それからもつと“人間”の一生という過程を通じての食生活の見方をしなければいけないという問題。現時点だけを追うことでよいかという問題です。

だから、この食の多様性と個人性の認識をさせ

たい。“行政”関係の内容をその中に含めさせる。それから今の厚生省のやっていることを考えさせる。

### 具体例を展開しての“公衆栄養”教育

それから、あとは事例的なもので私は話しをしたいと思います。たとえば一番早い話で、自分でもついているところの材料を基に公衆栄養という概念を与える。貧血とか肥満がそれにあたります。貧血なら貧血と食という問題を押さえて、公衆栄養としての考え方をその中に入れていく。それで食の位置付けというものをしたいと思うのです。同時に、それだけでなく、公衆衛生学的なアプローチがなければ“貧血”はなくなることまで指導していきたい。住民の“健康の度合の象徴”としての貧血は、住民の健康を考える指標です。こういうと誤解を生ずるかも知れませんが、公衆衛生従事者あるいはそれにまつわる人々の位置付け、その中で食生活の意義付けをしたいなあと思つています。

高血圧の問題でも同じです。どなたかが自分の得意なところをとつておやりになればいいことであると私は思うのです。病人というものの対象ではない人ですね。不健康な人々という意味で考えていきたい。そういうふうな問題を2、3あげていけば、わかりやすく公衆栄養の内容が説明できるように感じます。

外国の具体的な問題は特別に講義しない。というのは、外国のひどい所の状態をいうよりも、日本にも現実にひどい所があつて——いうまでもなく東南アジアにおいて餓死が存在しているという現実があるのですが——この問題を大きく1～2時間の話しとして問題にしたい。

### 人口問題と食糧

同時にもう一つ入れなければならないのは、“人口問題”です。人口問題と食の問題がいつたいどういうふうに関係づけられて、どこで講義されているのか。“公衆衛生”の講義の中においては、一般的に人口問題の位置付けが少ないではないかとも思います。人口問題を踏まえての食糧の生産問題、それから健康ということに結びつけてか

ら、その批判的な体系をもちたいですね。それによつての食物、食生活の位置付けをしたいですね。何も現時点の流行という意味でなくてです。まあ私自身人口問題が好きだからそういうことにとられるのかも知りませんが、手前勝手にいいと思うのです。

それからもう一つ申し上げると、私はたとえば具体的に講義をしろといわれても、15週もやれるような体力がございません。しかしながら、私の考え方に協賛するとか同調する人があるならばその人々に講義を手伝つていただかないかぎりにおいては、私はできないという立場をとつています。そういうカリキュラムを私は作ります。

ですから、総論でほしい2回分を使って、“食”の問題で2回くらい。それともう一つは、食の“個人”というものの特性、それを尊重しなければいけないということから、そういうふうな考え方の調理、嗜好という問題、こういう問題を1回くらい入れなければいけないのではないかと思うのです。あと調査法と行政ですね。

そして人口問題を話します。これは1回で済むか2回で済むかわかりません。

そして残りの時間は事例で話しをしたいと思つています。しかし教え方や、内容は人によつて違ふと思うので、それを少し他の先生に話していただきたいと思うのです。

#### “公衆栄養” 講述案 (90分×15回)

- 1) 公衆栄養の必要性の社会的背景
  - 2) 公衆栄養の定義とその考え方
  - 3) 食物と食生活のあり方の原理と歴史的意義
  - 4) 食生活の社会的あり方
  - 5) 食品学・栄養学面からの公衆栄養アプローチ
  - 6) 食糧資源と食生活
  - 7) 人口問題と食糧資源
  - 8) 食生活面の嗜好・調理からの公衆栄養アプローチ
  - 9) 集団給食の公衆栄養の位置付け
  - 10) 食生活の評価 (食物摂取量判定の困難性)
  - 11) 住民の食生活を守る行政体制
  - 12) 生態学の食生活への取り組み
  - 13) 乳児、妊産婦の食生活のアプローチ
  - 14) 肥満・貧血問題からみた公衆栄養アプローチ
  - 15) まとめ
- 注：順序はまだ考えていない

(柳沢文徳・案)

### 食べることの基本

前川 公衆栄養について今の時点でお話する

I. 公衆栄養の視点

- 1) 公衆栄養についての社会的要請とその背景(1)
- 2) 公衆栄養の目的, 対象(1)
- 3) 人間の“栄養”と“食”(1)

II. 公衆栄養調査法

- 1) 適正な実態把握の必要性和調査の作業手順(1)
- 2) 調査方法の類型(1)

III. 公衆栄養の実態

- 例1) 世界の食糧, 生産, 人口, 栄養素摂取, 健康(2)
- 2) 日本人の食物摂取, 栄養素摂取, 健康(2)
- 3) ジャワの食事パターン, 栄養, 食糧政策(2)
- 4) O町の保健活動, 母親の食意識, 幼児の食事(1)
- 5) K町の都市化, 食品流通, 主婦の食事(1)
- 6) KおよびA部落の米生産の歴史とめし食, その伝承(1)

IV. 実践活動への問題提起

期末テスト(1)

(足立己幸・案: 本誌1月号再掲)

のは難しいと思うのです。まだこれから始めようとしている段階ですから。公衆栄養を履修する年次については、初めにもつていくとか、後ろにもつていくとか、その先生方のお考えですから…。

4年後ぐらいになると、栄養士養成施設のある大学ではどこでも一応の線が出てくると思います。その時点で、ある程度まとめていくということもできるでしょう。それに、こういう非常に変化の激しい世の中ですから、ケース・スタディ的なものもどんどん変わっていくと思うのです。ついこの間まではお米の問題で減産を奨励し、今度は増産というように…。

食生活のいろいろな情報のうち“公衆栄養”の中でいいたいと思つていましてのは、たとえば“二食主義”がいいとか“菜食”がいいんだ、“1週間たつて何kgやせた”なんていう極端な事例を反省させたい。人間の、つまりインディビジュアル(individual)の問題だつたら“ライフサイクル(life cycle)”というものがあつて、それぞれに合ったような食べ方、グループならどういふ食べ方、というような根本問題を公衆栄養では触れていかなければいけないのではないかなという気がします。そのためにはやつぱり栄養学関係の教科をきちつとやつておいてもらいたいと思います。

平均値としての食の考え方

柳沢 追加になりますが、近藤先生(東北大学

名誉教授)のお話しも1回ぐらいはほしいですね。近藤先生の食生活を踏まえるか、踏まえないかは公衆栄養の内容の大きな分かれ道になるのではないかと私は思うのです。

ただし、近藤先生の考え方は、表現は悪くなりますが平均値的なところがありませんので、よつほど栄養学を理解していないと、こんどはとんでもない間違いが起きる可能性があるという前提があります。

足立 近藤先生には“風土”というその地域社会とのつながりを強調した展開のユニークさがあり、公衆栄養的視点に立てられている一つの例のように思います。心配なのは、他の人があの展開をどこの地域にもそのまま画一的にあてはめてしまうことです。ああいう形での平均的なやり方(栄養素摂取中心方式から近藤方式の食物選択に衣を変えはするけれども)をまたやりかねない土壌が日本の栄養学やその実践の中にあるのではないかと……。

前川 そうですね。人間にはそれぞれ生きるリズムというのがありますからね。栄養学の平均的なものをこなして、はじめて自分の生きるリズムに合わせていけるということがあります。

足立 応用力、展開力があつて、使うときははじめて平均的な“基準”が効力を発する……。

前川 そのところが専門的な栄養学から“公衆栄養(学)”への一つの過程になつていのではないのでしょうか。

柳沢 それが楽な言葉でいえば、私のいう“批判”という言葉なのです。

足立 そうですね。

柳沢 それを“肯定する批判”“反対する批判”というものではないのでしょうか。

足立 そうですね。本当の批判力というのは、その内容を十分に理解した上でなければできないはずですから。

柳沢 そう思いますね。だから、いつも私は公衆栄養という問題だけではなくて、すべての栄養の問題においても、そういう考え方に基づいて行われなければいけないのではないかと思つてい

## スペシャリストの育成

前川 私の場合、先に申しましたように具体的な展開は難しいと思いますが、やっぱり“総論”に1~2回はかけなければならないと思つています。あとは“各論”形式でやつていきたい。そして最後に、柳沢先生の言葉でいえば“批判”ですか……。批判というより、人間が生きている“環境”に対し——小さくいえば自分の家族であり、その所属するグループであり、地域社会であるかもしれない。大きくみればもつといろんな環境というのがあるでしょうけれども——無理のない対応ができる方法をどう考えていつたらいいかということをお教えたい。

それは“絵にかいたばたもち”みたいに、たとえば発育期の子供に動物性の良質のたんぱく質を食べさせるといっても、今この牛肉の高価なとき使いきれません。挽き肉を買えば、挽き肉というのはどうも脂肪分だけが多すぎるようなデータもですし……。ともかく、家計だとか予算だとかそういう経済的裏付けというもの必ずついてきます。そこがまた“食”の難しいところではないでしょうか。その中でどういうふうに対応して処理していくかということが、これから育つそういうスペシャリストのほんとうの役目ではないかと思つています。

食物を扱う人たちというのは一種の“消費者”です。ですから、消費者からやはり企業サイドに“ものを申す”必要があると思つています。そのような専門家を育てたい。

## 諸外国の問題をどうするか

編集部 柳沢先生は“外国の問題はあまり事例として取り上げない方向でやつていきたい”ということでしたが、前川先生はどういうお考えですか。

前川 私は外国の問題もとりあげていきます。教え子の中に“日本青年海外協力隊”としてタンザニアで働いたり、また今度マレーシアに行く人もおります。

彼女がタンザニアから帰つてきて“この貧困、この無知、いつたいたいどうしたらいいの？”と私

に問いかけました。発展途上国の栄養指導は難しい。しかし、このようなケースが、公衆栄養の一つの柱ではないでしょうか。

足立 外国の問題ですが、私は今の講義の中にも積極的にとり入れています。それには2つ理由があつて、一つは学生たちの——またイメージの話になりますけれども——“食”のイメージ、“食”の世界が非常に狭いんですね。それを空間的にも思いつきぐんと広げてやりたいという気持があるからです。日本だけではなくて、世界中を含めた、人類全体を包括するほどの食生活のイメージを描かせたいという気持と、もう一つはほんとうの日本らしさを知るためには、やはり外国との比較において日本の特徴をとらえるのではないかと思うからです。外国の食活動とか栄養状態を、日本との比較で知らせる機会が必要なのではないか……。と。

柳沢 私が外国の話しをしないということは、その国あるいは外国のある地域のものを日本と同じレベルでは取り上げないということなのです。学問であるから、外国の学術的な評価をするのはあたりまえのことです。しかし外国の住民の日常の具体的な食生活を私は実際において何も知らないからです。食生活というものは長年の風俗、民俗、宗教というものをとりあげても、それを理解しなければ、簡単に食生活の指導的なことでの批判ができないからです。

それから、特に外国の公衆栄養となると、その土地の政治、経済あるいは狭い意味では保健行政から突っ込んでいかなければならないし、それを知らなきゃなんにもできないし、しゃべれないからです。先生方のように、外国の住民と深く接触して理解されている方であれば、それをとりあげることがよいことでしょう。日本人の食生活がどうであればよいかということ、まだ十分考えなければならぬような私の立場ですから、外国のことを知る必要性があれば、課外講座として、その道の外人に話しをさせる方法を私はとるでしょう。その意味では、皆さん方より勉強がたりないということになりますね。外国人でなければ、その国で10~20年生活したその面の研究者に依存したいですね。しかし、現実には今ではそれをする

必要性もないと思います。

### 学校給食について

編集部 次に話しを移したいのですが、学校給食の問題についてはいかがでしょうか。

柳沢 当然、集団給食の管理問題の中には学校給食が入っているし、それから従来のものをみると“栄養指導”の中にも“学校給食”というものが入ってきているわけだと思うのです。今“学校給食無用論”という問題に対して——お母さん方がいろんな学校給食に対する問題点を投げかけていますが——答えるところの講義をこの中でするかどうかということですが……。

足立 私は“栄養管理”でそれを具体的な話題にして人間に対する栄養管理や栄養教育の必要性を考える材料にもしています。

前川 私は“給食管理”でそれを話します。

柳沢 そういうことになつてくると、公衆栄養というのは集団給食的なものではなくて、“住民的な位置付け”“国民的な位置付け”あるいは“人間としての位置付け”というもののほうが強く、そういう個々の“給食”といえますか、そういうものについては、それなりの学科にまかせればよいでしょうね。住民の健康と食生活の关系到集団給食をどう結びつけるかを、総括的な内容として、その上での必要性、不必要性の意識をどうとらえるべきかとも思います。その際には十分に住民の意志を知ることが大切ですし、それをすいあげることも課題になるでしょう。

足立 そうではなくて、今の“学校給食無用論”の提起する問題を“栄養管理”でとりあげるときは、先ほど申しあげました観点から、また“公衆栄養”でとりあげるときは、その地域社会の中での学校給食の役割、住民たちの食生活の発展の中での役割や位置を明らかにして、のぞましいあり方を問うという観点からで、それは強調点が明らかに違い両科目共で扱います。

幸か不幸か、“栄養管理”と両科目をもつていますから、“栄養管理”で具体的な展開技術について時間をかけてやり、“公衆栄養”で扱うときはその視点から問題を提起し、アタックしています。

### 事例の活用を生かした教育

編集部 足立先生には本誌1月号[46(1):15, 1975]で“公衆栄養教育の試み”というテーマでご執筆いただきましたが、何か追加することがありますでしょうか。

足立 柳沢先生が、“私は一つのケースを少しじっくりやるよ”とおつしやいましたが、実は私も今年はそうしようかなとも考えています。原稿では後半に6例ほどあげておきましたが、あれは少し忙しすぎて失敗でした。

世界全体を見渡すものが初めに1回、それから日本全体を見渡すものが1回、その次はどこか特定の地域を2例ぐらいにして、3～4回かけて少し丁寧に講義してみようかという気持ちになっています。1時間1ケースでやりますと、その地域全体の“栄養”や“食活動”について鮮明にイメージ・アップするほどネタを獲得できないらしい。1地域、最低3回くらいかけないと、食生活と健康との関わりあい、それからいろんなヘルス・サービス(health service)との関わりあいというような形での展開はできないようです。

前川 私は一つのケースとして調査なら調査をじっくりやるということは“栄養指導”の実習でするようにします。そうしませんととても“公衆栄養”の時間でそれだけのものは扱いきれません。栄養指導は“実験・実習”が3単位あります。ですから十分できるわけです。

足立 私の大学でも“栄養管理”の実習でフィールドワークの機会を与えています。2週間をフルに使います。その体験は、“栄養管理”だけではなく、“公衆栄養”に有効な素材を提供してくれています。

### おわりに

編集部 予定時間の関係もありますのでそろそろ終わりたいと思いますが、最後に何か追加発言がありましたらお願いします。

柳沢 特に公衆栄養教育に限ったことではないのですが、食物教育はまず最初に“何故、食物教育は大切なのか、そして将来それをどういかしていくのか”というようなこととお話ししていただ



きたいと思います。医学でいえば“医学概論”のような形式です。そしてとにかく自分たちで考えることができる学生を養成することが第一原則だと思います。

抽象的ですが、何も公衆栄養という講義をしなくても、それを考えている先生がいれば、学生はその先生の思想からいろいろ受けとめることができるのではないのでしょうか。

前川 公衆栄養のテキストができましたが、けしてそれがあれば公衆栄養教育ができるというものではありません。前にも申しましたように、時間をかけ、そして内容のある公衆栄養体系を、各自が作りあげ、それを総合化していくことが重要だと思います。

足立 “公衆栄養”は栄養への多面的なアプローチが強調されすぎて、こまぎれ的な分担講述の傾向があちこちにみられることに疑問をもっています。従来の栄養学教育の欠落部分を、部分的に埋め合わせるためだけの教科ではないと思うからです。重要なことは、そういった多側面から観たものを使つて、どのように総合的にとらえるか、評価するかにあると思うのです。したがって、責任担当者の明確な視点、観点に基づいて、必要な側面について、必要な知識が提供されることと、その総合的なとらえ方についての講述がなされる必要があると思うのです。

編集部 どうも長い時間有難うございました。

日本栄養士会賛助会員

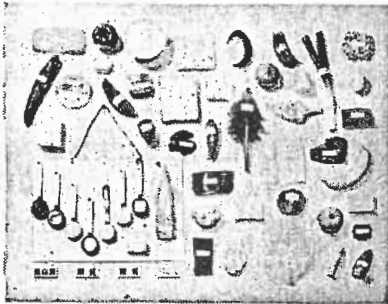
プラスチック製

# フードモデル

(基礎となる食品 50種)

- ◎磁石付
- ◎掲示用鉄板添付

定価 62,000円



国公立病院・保健所・市町村・事務所・学校・など、広い範囲で、すでに千数百ヶ所で、活潑なご利用を頂いております

詳しくは下記へご連絡ください

- ◎ フードモデルは、赤ちゃんの離乳食から、老人食まで、あらゆる健康食、治療食の食事構成ができます。
- ◎ フードモデルは、一品毎に、目方・カロリー・蛋白質・脂質・糖質・ビタミン類の含有量を表示していますので、食事の構成や指導が、早く、しかもかんたんにできます。

## フードモデルのほか発売中の模型

- フードモデル補充用模型 (100種以上) 単価表請求下さい
- 糖尿病食構成模型(基礎食品31種)…………… 定価45,000円
- 高血圧病食構成模型(同上 32種)…………… 定価46,000円
- A型・離乳食模型(4期30種)磁石付…………… 定価56,000円
- B型・離乳食模型(同上)個装式…………… 定価51,000円
- 腎臓病治療食構成模型(基礎食品50種)…………… 定価60,000円
- 糖尿病治療食献立例模型(A)(1200カロリー) 定価49,000円
- 同上 (B)(1600~1800カロリー) 定価51,000円
- 高血圧治療食献立例模型(2000カロリー)…………… 定価53,000円

東海北陸以東 総発売元

東京 医科学資料研究所  
〒143 東京都大田区中央八丁目23-2  
電話・東京(03)752-4782

近畿以西総発売元

川崎 フードモデル  
〒725 広島県竹原市竹原町946  
電話・竹原(08462)2-2588